

横須賀ネイティブの自文化＝自分化グラフィー ——文化人類学における他者表象をめぐる内省から——

清水 展

〈子どもの頃の心象風景〉(写真1の作文)

「ぼくが住んでいる安じんづかは、四方八方山ばかりだが、春になると山一面に白い山ざくらや赤いやえざくらがさきみだれ、遠足や花見客でにぎわう。ツツジで囲まれたおほか(墓)は、ぞうせん(造船)のことを教えたウィリアム・アダムスのおほかだ。四月の按じんさいは、おどりをおどったり外国人の楽隊がラッパをふいたりする。みんなのしている前で外国人のえらい人がサーベルをぬく。

つかやま(塚山)公園にのぼると、東に外国のぐんかんや、空母、せん水かんやまるは(マルハ大洋漁業)のキャッチャーボート、うらが(浦賀)ドックのクレーンなどがずっしりと立っている(のが見える)。向こうがわ



写真 1

1953年7月、2歳の夏祭りの日に、横須賀市長浦町3丁目にあった引揚者寮の前で。2階建て寮は1、2階とも同じ間取りで、真ん中の廊下をはさんで左右両側に8畳一間ほどの部屋が並んでいた。そこに一家族ずつが住み、廊下の突き当りには竈が7~8つと水道のある共同炊事場があった。共同便所は戸外にあった。同じ造りで計5棟あり、我家は第2寮の2階にあった。

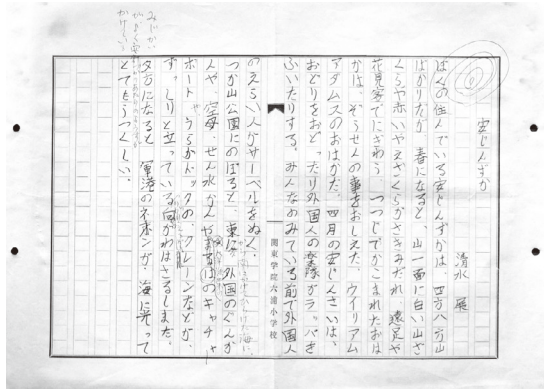


写真2 関東学院六浦小学校4年ヨシユア組のときの作文。安針塚は自宅から歩いて10分ほどにある京浜急行線の駅名。戦前は工廠前駅だったが、海軍工廠の存在を隠すため戦中に名前が変えられた。横浜市金沢区にある学校まで小中高は電車通学した。学校の最寄り駅の追浜までは、安針塚から次の田浦まで4つ、その先の追浜まで1つのトンネルがある。反対方向の逸見、汐入、横須賀中央へは、各4つ2つ1つのトンネルを抜けてゆく。

子ども心に山また山が続く深い谷あいに住んでいる田舎と思っていた。安針塚駅前から左手に折れ、細い川に沿って上流に歩いて10分弱のどん詰りに引揚者寮があった。川は夏にはオニヤンマが行きかい、夜にはホタルが舞い、サワガニがいた。駅前を右手に進むと国道16号線を超えた先に東京湾があり、マルハ大洋の工場があった。谷の小川は東京湾に流れ込んでいた。

はさるしま（猿島）だ。夕方になると、軍港のネオンが海に光ってとてもうつくしい。」

注：塚山公園は徳川家康に仕えて造船技術などを教えたイギリス人ウィリアム・アダムスの墓があることから塚山と名付けられた。県立公園として整備され、数百本の桜が植えられている。安針塚駅から谷戸の狭い道を10分ほど歩くと分かれ道に至り、左手に進むと公園への上り道となる。右手に進むとすぐに小橋を渡り五棟の引揚者寮となる。4月上旬の花見のシーズンには酔客のグループが持ち帰らなかった一升瓶やビール瓶を引揚者寮の子どもらが集めて、酒屋に持ち込み瓶代をもらって小遣い稼ぎをしていた。塚山公園の一带は寮のある場所も含めて風致地区とされている。

1. はじめに：考察の射程

本稿は、私自身の自己形成史を縦糸とし、横須賀と横浜の戦後社会史を横

J-Talk: Diggin' Culture #01
Speaker: Dr. Hiromu Shimizu (Professor, Kyoto Univ.)

A city with the US military base

YOKOSUKA

Casual talk on the city & its relation with:
Momoe Yamaguchi (Singer / Actress in 70s)
Jun'ichiro Koizumi (Ex-Prime Minister of Japan)



19:00 – 21:00 Tue 20 December 2016
@Classroom E, the Japan Foundation, Bangkok

JAPAN FOUNDATION

写真 3

国際交流基金バンコク事務所
 で山口百恵と小泉純一郎をと
 おして米軍基地のある街とし
 て横須賀を論じた講演会のポ
 スター（2017年2月3日）。
 山口百恵が歌った「横須賀ス
 トーリー」（1976）の物語世界
 をよく表現している。

糸として織り上げて一幅のタペストリーのように作りたいと願っている一書の序章に当たる。先の『東洋文化』100号（2020）に掲載された拙稿「外部思考=感覚器官としての異文化・フィールドワーク：ピナトゥポ・アエタとの40年の関わりで目撃した変化と持続，そして私の覚醒」の続編にあたる。そこではフィールド・ワーカーでありエスノグラファー（民族誌家）であるとの自覚をもつ私自身の生活と仕事の仕方について過去を振り返り，応答の人類学を唱えるに至った個人史を記した。前稿が人類学者としての仕事や発言というカミシモ（袴）を着て社会的役割を演じたことと背景と個人的な心情の説明であったのに対して，本稿はカミシモを脱いで平服を着た人間として自分史を語りたい。またこの10年ほど提唱してきた「応答の人類学」に関して言えば，今まで裏番組または隠された意図として温め続けた，私の頭が私の心の声を聞き，応答しようとする試みである¹。

¹ 私自身の小賢しい頭が抑圧してきた私の心の声を聞こうとする本稿の試みは、『東洋文化』が今まで4回にわたって特集号を編んできた「魂の脱植民地化」の問題意識に直接に連なっている（第89, 90, 92, 95号，2009～2015）。また，私が30年あまりの追っかけ調査を続けているフィリピンのドキュメンタリー映画監督で文化芸術アクティビストのキッドラット・タヒミックのラ

記述と考察の対象は1951～1991年までとする。それは、私が生まれた年でありサンフランシスコ平和条約（同時に日米安保条約）が結ばれた年から東西冷戦体制の終わり（ソビエト連邦の崩壊）までを含意している。朝鮮戦争からベトナム戦争、そして東西冷戦が続くあいだ、横須賀の街はアメリカ第7艦隊の母港であるがゆえに、常にアメリカ軍と戦争の影の下にあった。横須賀港には大規模修繕も可能な大型ドックがある。それゆえアメリカが有する7つの空母打撃艦隊のなかで唯一第7艦隊だけがアメリカ本国以外に事実上の母港を置き、作戦を常時展開させてきた。現在では南シナ海（西フィリピン海）や台湾海峡で中国の進出に伴う緊張が高まり、第7艦隊を基軸として米日韓、さらには豪比そして英仏との連携が強化されている。朝鮮戦争（1950～52）、ベトナム戦争（～1975）、そして現在の中国をめぐる緊張のなかで、横須賀はアメリカ軍の最前線のひとつであり続けてきた。

また1991年は、文化人類学を学ぶ大学院生として私が1977～79年に20ヶ月のフィールドワークをしたカキリガン村のあるピナトゥボ山が6月に20世紀最大規模で大噴火した年であった。そのとき私はたまたま1年間のサバティカル（研究休暇）でフィリピンに滞在し始めたばかりだった。その噴火によって、かつて調査を助けてもらいお世話になったアエタの友人知人たちが被災した。たまたまの巡り合わせでフィリピンにおり、しかも大噴火の当日の6月15日は私の不惑の誕生日であった。それを何か深い意味のあることに違いないと考え、また「義を見てせざるは勇なきなり」と自分に言い聞かせ、アエタ被災者の緊急救援・復興支援をする日本の小さなNGO（AVN、アジア・ボランティア・ネットワーク）の現地ワーカーとして活動した。

そのことが、結果として私自身の調査研究スタイルを大きく変えていった。1991年は、私にとって研究をいったん停止して立ち止まり、フィールドワークをすることや文化人類学者の仕事についてあらためて考え直すことを迫られる年となった。そして状況に巻き込まれるままにアエタ被災者への支援活動に関わり続けることによって、知らず識らずのうちにフィールド

イフ・ワークである、アメリカによって作られた植民地臣民＝主体（colonial subject）としての彼自身の脱構築（自己の解放と再構築）のプロジェクトに刺激され示唆を受け考えてきた途中経過の報告でもある（清水2013: 6, 82-85）。

(の人々や彼らが直面する問題)と応答を続ける人類学の模索へ、さらには提唱へと変わっていった²。

噴火で被災したアエタとの関与・応答を続けた背景には、E. サイドの『オリエンタリズム』(1986)による批判と問題提起が基層低音のように鳴り続けていた。同書の英語版(1978)は、私が1984年にハーバード大学に1年間の在外研究に出かけたとき大学生協に平積みとなっていた。正直に言う買ってパラパラと読んでも、基礎知識と英語力の不足のために内容を理解できなかった。その後、日本語訳が出版されたので、訳者解説と合わせ読むことによって初めて概要を理解できた。さらにはアエタ被災者への支援活動をとおして、同書はフィールドワークと民族誌という文化人類学を支える2つの柱の問題点と可能性を再考する手助けとなった。

サイドが提起した表象と政治をめぐる問題への応え方のひとつは、現地と世俗的にコミットすることになるだろう。彼自身が『知識人とは何か』(1995 [1993])で、それはアマチュアとして社会(世俗)的な問題にコミットしてゆく姿勢であると明快に言い切っている³。しかしながら人類学では、サイドの流れのなかでクリフォード&マーカス(編)『文化を書く』(1996 [1986])が提起した表象の仕方をめぐる問題系への対処が主流となった。それに対して私は、他者を「正しく」表象することや彼我の権力関係を無化することを書式や技法によってテキストの内側で解決しようとすることは、たとえ真摯であっても偽問題への回答探しであり逃避だと思った。そうでなくて他者・現地の人々との対等な関係(相互性・お互いさま)を原則として行動することがまっとうな対応であろうと根拠なく思い込んでいた⁴。

² サバティカルの滞在中には、それまでの研究の延長上に「フィリピン大衆文化と政治意識・運動」(いわゆるカルチュラル・スタディーズの分野)の調査をするつもりだった。それが思いがけない出来事の連鎖に巻き込まれ流され、噴火の被災によって苦難の道を歩み始めたアエタの友人知人たちの緊急救援と復興支援をするNGOのボランティア・ワーカーとなり、そのままフィールドでの関係や活動を調査の終了後も続ける「応答する」人類学を実践し、提唱するようになった。

³ すなわち、知識人とは隠遁した哲人王のごとき者でなく、社会に囲い込まれ、丸め込まれたり、こづきまわされたりしたときに、またそのような基盤の上にたつてはじめて、知識人の仕事は成立する、と述べている [サイド 1995: 119-120, 清水 2021: 67-68]。

⁴ 拙著『噴火のこだま』(2021 [2003])は、ピナトゥポ噴火の被災から生活の再建そして先住民としての覚醒とフィリピン国民としての自覚を強化していったカキリガン村および周辺のアエタ・グループの復興の歩みと私自身の関与の報告であると同時に、『文化を書く』に対するささやかな異議申し立てであった。

実際、1979年にフィールドワークを終えた後には、私より2週間ほど遅れて妻（山下美知子）がカキリガン村の小学校を卒業したばかりのカルメリータ・ソリアと一緒に連れて日本に帰り、彼女の実家の福岡県京都郡光富の田舎と神奈川県葉山町で半年ほど暮らした。そのあと山下氏がカルメリータをカキリガン村に連れて戻り、国道沿いのサン・マルセリーノ町の私立高校に入学するための段取りをし、以後、学費と生活費の仕送りをした。しかし残念ながら、彼女が高校4年生のときに失恋の痛手から卒業前に退学してしまった。

相互性の原則、つまり私が先方の善意に甘え招待を受けずに押しかけて調査をしたのだから、そのお返しとしては逆に相手方から誰かが日本に来て生活し、見聞し調査研究をしてもらうのが筋だろうと単純に考えた。けれど具体的でわかりやすい相互性の実現というカルメリータに託した試みは未完に終わってしまった。それで今更ながらの感もあるが、次善の策として本書を書こうと考えた⁵。招かれたわけでもなく一方的に訪問し、ニコニコして人畜無害を装いながら村に住まわせてもらい、毎日のように村のなかをブラブラ散歩したり家庭訪問したりして他人様の日々の暮らしや私生活の覗き見をさせてもらった。そのおかげで私は博士論文や単著を書くことができた。だから文化人類学者として、間接的ではあるがそのお返しに、せめて自分の私生活や心象風景も隠さずにお見せしなきゃあ、率直に語るなればと思った次第である。

噴火に戻ると、そのインパクトはアエタ社会のみならずフィリピン社会と比米関係にも決定的な影響を与えた。ピナトゥボ山の東麓に位置するクラーク米空軍基地にも火山灰が大量に（20～30センチ）降り積もり、基地の施設が甚大な被害を受けた。そのときフィリピンにある米軍基地の貸与期間が終わるのでさらに25年間延長する政府間交渉がほぼ合意に至っていた。しかしアメリカ側が噴火で被災したクラーク基地の施設の復旧のための工事費用を見返りの経済軍事援助から減額することを求めた。フィリピン政府がそれに応じて条約は調印されたが、その後の上院での審議で批判されて条約は

⁵ カルメリータの後には、マリアーノ・ソリアくんが高校卒業後に西ルソン農業大学で学ぶための生活費と学費を支援した。幸い彼は期待に応じてコミュニティーの知識人、リーダーとしての役割を果たしている。彼は高校まではカキリガンで開発プロジェクトを行っていたNGOのEFMDから学資奨学金を得ていた。

否決され批准に至らなかった。理由は、比米間の特別の歴史（20世紀前半の植民地支配）を想起すれば、自然災害で苦境にあるときには格別の配慮と支援があつてしかるべきなのに、逆に足元を見るかのように援助額を値切られたことに、上院議員らのナショナリズムが強く刺激され反発したからであった〔藤原 1993〕。翌 1992 年にはフィリピンからすべての米軍基地が撤退した⁶。

ピナトゥボ山の南西には 30 キロあまり離れてスービック海軍基地があつた。マニラからカキリガン村まで行くためには、マニラ北西地区にあるモニュメント・バスターミナルからビクトリー・ライナー・バスに乗ってオロンガポ市まで行き、そこでミニバスがジープニーに乗り換える必要があつた。2、3 ヶ月に一度くらいの頻度で学用品や医薬品、食料などを買うために、そして美味しいものを食べて栄養補給と休養をするためにマニラに 3、4 日ほど出かけた。その行き帰りには、いつもオロンガポ市を通り、横須賀の街と同じ雰囲気と臭いを感じた。マニラにゆく際には村の小学生 3、4 人を修学旅行と称して一緒に連れていった。NGO ディレクターのティマ夫妻がケソン市の U. P. ヴィレッジのはずれにあるアパートの一ユニットを持っていて、大学で学ぶお二人の甥や姪が管理人を兼ねて住んでいた。その一室を間借りしていて、カキリガン村と同様にそこにバニグ（ゴザ）を敷いて子供たちと雑魚寝をした。

フィリピンでいちばん遅れて未開とされていたアエタ（アジアタイプのネグリート）の集落への行き帰りの途中にオロンガポを通りバスを乗り換えるたびにいつもアメリカの影を強く感じた。実は東麓側（パンパンガ州）に住むアエタの一部（主にイナラロ村）は、ベトナム戦争のあいだ北爆（北ベトナムへの空爆）に従事する米軍パイロットとナビゲーターのためにピナトゥ

⁶ 米軍が全面的な撤退に応じたのは、ソ連との冷戦に勝利したことで在比米軍の戦略的価値が低下したからであり、ソ連海軍もベトナムのカムラン湾から撤退していた。一方で中国は「中華人民共和国海商法」を制定し 1993 年より施行して海事海商に関する法律を整備するとともに、他方で南シナ海の満潮時には海面下に没する環礁の幾つかの埋め立て工事を精力的に始めた。当初から一貫して、そこで漁業をする漁民が台風その他の緊急時に避難するための防波堤と港、灯台を建設するという平和目的であると説明したが、フィリピン政府はその意図を警戒し、アメリカの国務省に報告したり国際世論への注意喚起を図った。在マニラの外国人記者クラブの会員を招いて飛行機による現地視察のツアーを企画したりした。がその効果はなく、中国はフィリピンが領有権を主張し西ルソン・サンバレス州の漁民たちが漁場としていた南沙・スプラトリー諸島のミスチーフ環礁の埋め立てを始め滑走路を含む基地を建設した。

ボ山中で行われたジャングル生存術訓練のインストラクターとして米軍クラーク基地と深く関わっていた。

横須賀で生まれ育ち、アメリカの植民地であったフィリピンに留学し、しかも米空軍と海軍の2つの巨大基地に近いピナトゥポ山にある先住民アエタの集落でフィールドワークをしたことで、私はいつまでたってもアメリカの影の下から逃れられずに生活してきたような気がしていた。多くの日本人とは少しばかり違った生育歴、経験なのかもしれない。だから個人史と折々の心象風景を書き記すことに少しは意味があるだろう。

横須賀に生まれ育ったことがアメリカへの愛憎半ばする心性を作ったと自覚していたこと、そしてベトナム戦争に介入した「アメリカ帝国主義」への反発から、高校生の頃から中国の毛沢東思想と文化大革命に強い関心をもった。高校に進学した後、大学入試の国語の出題に出る頻度が高いからと、父に頼んで購読紙を産経新聞から朝日新聞に変えてもらい、週刊誌の『朝日ジャーナル』や総合誌の『世界』を読んだりしていた。その影響が大きかったのだろう、資本主義に代わるオルタナティブな社会を構想し作ってゆく導きになりそうとの過大な期待(幻想?)を中国に持った⁷。父親が興亜院の土木技師としてハルビンに長く住み満州統治の歯車となったことへの負い目も感じていた。それで東大文Ⅲ(文学部進学コース)に入学してから第二外国

⁷ 父親は私が毛沢東思想に惹かれてゆくのを危惧して、中国人と中国社会の実際は日本のマスコミが報道するようなとはまったく違うと言っていた。私のほうは、興亜院の土木技師とはいえハルビンに長く住んでいたのだから、人体実験をした石井部隊とも少しは関係があるのではないかとの疑念をもっていた。そのことを父に聞いたしたらきっぱり否定し、確かに日本人の兵隊をはじめ中国人にひどい仕打ちをした連中は多かったかもしれないが、自分はハルビンの松花江の河岸や主要道路などのインフラ整備をして中国人の生活向上にお役に立つ仕事をしたと悪びれるところがなかった。

父とはあまり話をするとはなかったが、今も記憶に残っているハルビン生活のエピソードのひとつは、レストランやダンスホールのようなところで働くロシア人の若い娘が細身ですごくきれいだったこと。おそらくはロシア革命を逃れてきた上流階層の娘さんたちで品も良かったという。でも30歳を過ぎるとだんだん太ってきて若い頃のスタイルと美貌の面影がまったく失われてしまう、ということだった。別のエピソードは、ある夜、外で飲みすぎて酔っ払ってしまい、道路端で横になって寝入ってしまった。初冬のころでそのまま朝まで眠り込んだら確実に凍死していただろう。たまたま通りかかった馬車の御者が声をかけて助け起こし、自宅まで送り届けてくれたという。「もし彼が来なければ、そして助けてくれなければ俺は死んでたし、お前も生まれることはなかったんだぞ、中国人に恩があることを忘れるなよ」と真顔で言われた。

語として中国語を選択した⁸。

2. 横須賀ネイティブであること

本稿のタイトルには奇異に見える造語が2つある。ひとつは横須賀ネイティブ、もうひとつは自文化=自分化グラフィーである。その2つの言葉に集約されている本稿の意図を簡単に説明したい。自文化=自分化グラフィーについては、第4節で説明する。

まず横須賀ネイティブとは、私が横須賀で生まれ育った原住民であるとの自覚の表明であり言挙げである。正確に言えば、生まれたのは米軍基地のメイン・ゲートから200メートルほど離れた正面の小さな丘の上にある聖ヨゼフ病院である。基地のゲートを出てすぐ国道16号線とドブ板通りを横切り、そのまま真っ直ぐに進んで諏訪神社横の坂を上がったところにある。元々は帝国海軍軍人と家族のために設立された病院であった。敗戦後に米軍に接收されてカトリック女子修道会聖母訪問会に経営が移管され、聖ヨゼフ病院と名称が改められた。小学校を卒業するまで、熱を出すたびにそこの小児科に連れてゆかれ、ほとんどいつも喉をルゴールで焼かれ、尻に注射をされた。

⁸ クラス担任で中国語の工藤篁先生はご自身が毛沢東思想に関心をもち、伊豆半島の伊東市で労学連帯・中国語学習会などを主催された。私が進学した教養学科では3、4年生のあいだに外国語を8単位履修することが義務付けられており、私は中国語を履修し、『毛沢東語録』や『実践論』、革命京劇『紅灯記』などを教科書として学んだ。そして卒論も修論も主に中国語の資料を用いて台湾の宗教（卒論はアミ族の巫覡、修論は漢人の靈魂観念と祖先崇拜）をテーマとした。博士課程に進学してフィールドワークの計画を立てる時、できれば中国本土で、さもなくば台湾に留学して調査をしたいと願った。しかし1970年代後半は、文化大革命の余震が続いて中国の大学は閉鎖されたままであった。一方、台湾は田中角栄の決断による日中国交回復（1972年）にともない正式な外交関係が絶たれ、公的な奨学金を得て留学する道が閉ざされていた。それで止む無く、台湾山地民と北部ルソン山地民はマレーポリネシア系の言語文化圏のなかの隣人同士であり、両者の比較研究には意味があるとの調査計画書を作って文部省アジア諸国派遣留学生に応募し、運良く選抜された。

しかし実を言うと、フィリピンはいちばん行きたくない国だった。理由は、先の太平洋戦争中に日本から60万人の将兵が派遣され、内50万人弱が戦病死していること、フィリピン側の犠牲者はフィリピン政府の発表で110万に達し、だから反日感情がきわめて強いこと。そして横須賀で見てきた風景をまたフィリピンで見るのは嫌だな、という忌避感が強かったからであった。にもかかわらずフィリピンを選んだのは、修士課程までの研究テーマの延長という理由付けがしやすく、他の国に比べれば奨学金を得る可能性が高いとだろうとの打算からだった。それまで海外に出かけたことがなく、また人類学を学ぶ者としてぜひ長期のフィールドワークをしたいと強く願っていた。

そして私が育ったのは、米軍基地ゲートから2キロほど離れた引揚者寮であった⁹。そこには2階建てで同じ形の計5棟の寮が並んで建てられていた。1棟で40世帯弱、5棟で合わせて200世帯近くが住んでいた。なかには基地で働く人や、米兵相手のバーで働く女性もいた。そんな女性の一人が1階の部屋に住んでスピッツ犬を飼っていて、前を通るといつもキャンキャンと鳴いた。

基地周辺に住む貧相な日本人は、アメリカ人の兵士・軍属の目には、無条件降伏をして敗戦を受け入れ米軍の進駐を歓迎している現地の日本人、つまり現地人、原住民、ネイティブそのものに映ただらう。米兵らが接触するのは、基地の中でも外でも基本的にはサービスを提供する者たちであり、米軍と米兵そしてその家族らを顧客として日々の糧を得ていた。そこには厳然とした力関係が存在していた。実際には面従腹背によって自尊と日本人の矜持を守ろうとしていても、表面的には戦争に敗け、飼いならされた日本人である。そのことを改めて想起し自覚し振り返り、ネイティブであることを引き受けて考え語ろうとする心構えの表明としてネイティブと名乗る次第である。しかも小学校から高校まで私立のパプテスト派のミッションスクールに通い、家ではテレビでアメリカのホーム・ドラマや西部劇、ラジオやレコードでアメリカ大衆音楽、そして高校からは映画館でハリウッド映画に魅了され、「洗脳」され、飼いならされてしまった。その意味で、まさしくアメリカ文化帝国の臣民（サブジェクト）と言えるであろう¹⁰。

ただし私はそこで生まれ育ったゆえに横須賀ネイティブ（の人類学者）ではあるが横須賀の先住民ではない。単に歴史的な先後関係から言えば、そこで先住民と言えるのは江戸時代には小さな漁村であった村に住んでいた者たち、具体的には帝国海軍の軍港が建設される前から住んでいた者たちの子孫であろう。しかし、横須賀で暮らす者の感覚としては戦前の海軍関係者と家

⁹ 父親は興亜院の土木技師として満州のハルビンで長く働いたが、敗戦の半年ほど前に北京に近い天津市の港湾地区の塘沽（Tánggū）に転勤となりシベリア抑留を免れた。ただし引揚船で舞鶴に上陸した後、駅でトイレに行くために2つのトランクケースを外に置いて見知らぬ人に見張りを頼んだところ、トイレから出てきたらトランクは消えていたという。ほぼ全財産を失くして、裸一貫で戦後の生活を始めた。

¹⁰ 子どもの頃は、ベースという場所（米軍基地）を示す言葉とシンチュウグン（進駐軍）という軍隊と兵隊の両方を指す言葉が周囲に溢れていた。ベースで働く日本人労働者は全駐留軍労働組合（全駐労）を組織し、産業別組合としては国家公務員や独立行政法人など国等に雇用されている労働者の組合で構成されている国公関連労働組合連合会（国公連合）に加盟していた。

族が先住民であり、戦中戦後の転入者は他所者や新参者となる。私の両親は群馬県安中市の出身であり、敗戦後に中国から舞鶴に引き揚げてきた父が横須賀市役所に職を得たことで新住民となった。そもそも横須賀は明治期に帝国海軍の軍港が建設されることによって発展してきた街である。その意味で横須賀の住民のほとんどは富国強兵の政策のもとに全国各地から集まってきた海軍関係者や労働者としての転入者であった。とはいえ私自身は横須賀のネイティブであることに強い自意識をもっている¹¹。

そして戦後日本の特異点（のひとつ）と言うべき横須賀に生まれ育った自身の身の回りの風景と自己形成のプロセスを振り返り、私のなかに凝縮されてあるアメリカの影・ヘゲモニーをしっかりと見つめ、その力の作用の仕方を腑分けしたい。それは文化人類学を学んだ私が、アメリカの影のなかで生きてきた自分自身を客観的に、かつ意識的に突き放して冷静に振り返って見据え分析するという、かなり困難であろう企てへの挑戦である。しかし能の世阿弥が「離見の見」と呼んだ見方に通ずるところがありそうだし、難しいヘーゲルの哲学用語を使えば、即自的存在としての自分を観察者として対自的に分析する企てといえるだろう。

即自的と対自的などという発達過程における自己意識のあり方の違いを比喩的に用いて二人の自分がいるようなことを言うのは、観察分析する側とされる側との一人二役という意味とともに、分析される側の少年・青年期の私自身がアメリカに対する愛憎半ばする感情に引き裂かれていたからであった。引き裂かれているからこそ、一方の自分が他方の自分を冷静にというよりも嘲笑気味に見ていた。身近にある米軍基地から溢れ出してくる米兵の圧倒的な存在感と具体的な暴力や酒とセックスへの露骨な欲望の発露への嫌悪と反発が一方に強くあった。が他方では、テレビやラジオやレコードやスクリーンのなかのアメリカ大衆文化には心惹かれ強く引きつけられていた。ラジオでは米軍の極東アジア放送（FEN）を聞くことができた。中学高校の

¹¹ それは私が40年ほどの調査と交流を続けている西ルソンのピナトゥボ・アエタ（アジア系ネグリート）が、1991年の大噴火による被災と復興の歩みをとおして民族的に覚醒し、自分たちのことをカトゥトゥボ（*katutubo*: 土地の子）と自称し始めたことと似ている。語根のトゥボは芽を出すという意味であり、カトゥトゥボはその土地で芽を出し根を張り成長する植物のイメージと重なりつつ、その地で生まれ育った者たちを意味する。彼らはフィリピン列島に最初に渡来した真正の先住者の子孫であり、彼らはピナトゥボ山の大噴火の後の生活再建の過程でそのことを強く自覚するようになったが、カトゥトゥボには先来や先住の意味はない。

音楽好きの同級生の何人かは、それでビルボードのホットチャートが紹介されるのを聴いていた。つまりアメリカに憧れる自分がいて、それを冷ややかに見る自分がいて、さらに冷ややかに見る自分に対しては「カッコいいもの、好きなものは好き」と開き直る自分がいた。

愛憎半ばというよりも愛と憎とに二つに分裂してはいるものの、しかしどちらも本当の私なんだろうという自覚はあった。たまたま身を置く場所のなかで一方の自分が引き出されてくるという感覚をもっていた。横須賀の引揚者寮では米軍基地への嫌悪と反発が、横浜の学校ではアメリカ文化への憧れが強かった。1日のなかでも平日の昼は前者、夕方から朝までと休日には後者の自分が引き出された。分裂した自分が昼と夜の間で揺れている感覚だった。一方であこがれや心酔、他方で嫌悪と忌避感に引き裂かれて青春を送った自身について、その頃の心象風景や精神世界の記憶を呼び起こしながら腑分けし分析してゆきたいのである。その心構えと視線から、ジョン・ダワーが『敗北を抱きしめて』（2001）という表現で凝縮させた、敗戦を甘受した日本社会という風景を、違ったように見なおしてみようというのが本稿の目的の一つでもある。

さらにまた、東京が政治経済の面で日本の中心であるとの常識を受け入れつつ、しかし文化に関しては東京は（銀座や赤坂、六本木も含めて）「ダサイじゃん」「カッペじゃん」と粋がっていた60年代70年代の横須賀・横浜の悪ガキ・不良たちの心象風景に沿いつつ、東京を遅れていると気取ってキザに構える心性が、基地を通して流れ込むアメリカ大衆文化（音楽、ファッション、車等々）への近さという意識によること。しかしその近さが、逆に身近な存在として感じさせられる米兵のセックスと暴力という生々しさとも表裏一体になって共にあること。好悪と愛憎とが入り混じったアメリカへのアンビバレントな感情と姿勢が、悪ガキを含めて横浜・横須賀の住民に広く見られ、それが日本の中心としての偉そうな東京に対する屈折した優越感となっていること¹²。そうした捻れた意識を我が身を腑分けしながら分析し、

¹² ただし横須賀の悪ガキと横浜の遊び人の粋がり方はファッションからして異なっており、横須賀ではスカジャン・スカマン、横浜ではIVYファッション（女性はハマトラ）が基本であった。スカジャンはヨコスカ・ジャンパーの略語で、素材は光沢ある化繊で背中に富士山や花鳥風月などの派手で大きな図柄の刺繍を施して、日本らしい土産として基地の米兵に人気があった。おそらくはスタジアム・ジャンパーを元にした日米合作のクレオール文化と言えるかもしれない。

これからの自分の生き方や政治社会的な身の処し方をあらためて考えてゆくための準備作業ともなっている¹³。

そしてアメリカを媒介とすることで、20世紀の前半にアメリカの植民地支配を受けたフィリピンと無条件降伏後に占領支配を受けた日本を、アメリカの影の下（戦後の東西冷戦体制の枠組みのなか）で自己形成を余儀なくされた同類、あえて極論すれば東南アジアの異母キョウダイとして見直そうとする企ての出発点ともなる¹⁴。たとえばフィリピンはアメリカからの独立を果たす時（1946年）、2つの条件を課せられた。ひとつは米比軍事基地協定（1947）で、それによってアメリカはフィリピン全土に23の基地（24万ヘクタール）を保持し使用する権利を賃借料なしに99年間得た。日米安全保障条約を想起させる。また米比通商協定では8年間の自由貿易（無関税）とその後20年間の特惠貿易が認められた。さらに特惠供与でアメリカ側は、憲法上ではフィリピン国民およびフィリピン企業だけに留保されていた天然資源の開発利用と、公益事業に経営参加できる一種の内国民待遇権を獲得した。[浅野 1991: 13-14]

ただし比喩的に言えば、アメリカの植民地支配（1898～1946「恩恵的同化」“benevolent assimilation”と称してアメリカは自己正当化した）を忘れないのに忘れられないフィリピンと、アメリカの占領支配（1945～1951 検

スカマンはヨコスカ・マンボの略語で、膝下を脚絆のようにピチッとさせた細身のジーンズを指す。IVYはアメリカ東部の有名大学のグループの略称で、古いレンガ建ての校舎の壁が蔦(Ivy)に覆われていることから名付けられた。Ivy ファッションは、チノパンにボタンダウンのシャツ、ブレザー・ジャケットなどがベースとなる。今でも私の基本的なファッション・センスと趣味は60、70年代からほとんど変わっていない。それほどに強烈なアメリカの文化的ヘゲモニーによって自己形成をしてきたと素直に認めなければならないだろう。

¹³ それは井上章一郎が『京都ざらい』（2015）のなかで、京大有名教授の杉本秀太郎や梅棹忠夫を引き合いに出して洛中の人間のプライドの高さを面白おかしく揶揄しながら、「嵯峨そだちで宇治在住、洛外の民として」卑下しつつ開き直る心性に通じるところがある。察するところ洛中人の誇りの元にはおそらく御所があり、御所すなわち天皇家との距離の近さ（地理的、理想的には社会的）によって家格が決められるという価値観が洛外の者を低くみる心性を生み出しているのかもしれない。横須賀・横浜の悪ガキ・不良たちの場合には、占領支配する米軍基地から漏れ出す大衆文化のおこぼれ（洋酒・洋モク、チョコレート、音楽 [FEN やレコード]、古着）へのアクセスしやすさ、それらに享受している自分の満足と優越といった倒錯があった。

¹⁴ 日本もフィリピンと同様に東南アジアに含めたいと思う理由は、第一に血縁関係の認識の仕方が中国や朝鮮半島の父系制とは異なり、父方母方の両方をたどる双系であること、第二に太平洋プレートとユーラシアプレートおよびフィリピンプレートが衝突する境界（接触臨界面）の上に日本～台湾～フィリピン～インドネシアの島々が位置しており、それゆえ同地域が地震や火山噴火などの自然災害に頻繁に見舞われる似たもの同士であることである。

闘と洗脳)を忘れてはならないのに忘れてしまった日本は、ある意味で対照的でもある。そして極端な比喻をさらに進めれば、異母キョウダイの父はダグラス・マッカーサーということになるだろう。マッカーサーは敗戦国日本への進駐軍の総司令官であり、日本に侵攻する前にはフィリピンとの関わりが深かった。日本軍が1941年12月8日に、ハワイ真珠湾の攻撃とほぼ同時にフィリピン侵攻を開始する直前、すでに退役していたマッカーサーは、1941年7月にルーズベルト大統領の要請を受けて中将として現役に復帰(7月26日付で少将として召集、翌日付で中将に昇進、12月18日に大将に昇進)し、在フィリピンのアメリカ軍とフィリピン軍を統合したアメリカ極東陸軍(USAFFE)の司令官となった¹⁵。

正直に言えば、フィリピン研究を45年近く続けてきて、今までフィリピンと日本を同類または異類としても直接に比較対照して考察することをしなかった。フィリピン社会・文化を語る時、その背後には常に日本との比較があった。にもかかわらず、その比較を明示的に語ることはほとんどなかった。けれどもいつまでも避けたり逃げたりしてはいけないだろう。これから

¹⁵ マッカーサーはウェストポイントの陸軍士官学校を1903年に首席卒業した後、順調に昇進を続け1930年にはアメリカ陸軍最年少の50歳で参謀総長に任命された。1935年に参謀総長を退任して少将の階級に戻り、フィリピン軍の軍事顧問に就任した。アメリカが植民地フィリピンを1946年に独立させることを認めており、フィリピン国軍の創設準備のためであった。初代大統領にはマニュエル・ケソンが予定されており、マッカーサーがケソンの友人であったという個人的な関係もあって軍事顧問を依頼された。18,000ドルの給与、15,000ドルの交際費に加えて、ケソンがオーナーであった最高級のマニラ・ホテルのスイート・ルームの滞在と秘密の報酬という破格の条件という経済的な理由により軍事顧問団への就任を快諾した。

1939年に第二次世界大戦が勃発するとアメリカ本国に異動を申し出て、後にヨーロッパ北西における連合国遠征軍最高司令部(Supreme Headquarters Allied Expeditionary Force)最高司令官となった。1941年7月にルーズベルトの要請を受け中将として現役に復帰(7月26日付で少将として召集、翌日付で中将に昇進、12月18日に大将に昇進)し、フィリピンに戻って在フィリピンのアメリカ軍とフィリピン軍を統合したアメリカ極東陸軍(U.S. Army Forces Far East)の司令官となった。1941年12月の日本軍の侵攻時にコレヒドール島の要塞に撤退して戦闘の指揮を続けたが、翌年2月に同島を脱出してオーストラリアへ避難した。脱出の際の「I shall return」という約束が、日本軍政下で多くのフィリピン人がゲリラ戦を続ける励ましとなった。

他方、日本の占領支配の最高司令官であったマッカーサーに対して、日本人50万人が手紙を書いたという(袖井林二郎1985『拝啓マッカーサー元帥様—占領下の日本人の手紙』)。内容は天皇に代わる絶対的な支配者に対してのさまざまな嘆願や解放と民主化の感謝などであった。しかしマッカーサーへの崇敬は、1951年5月にドイツの占領と比べて日本人はまだ12才程度であると述べたために急速に失われていったという。なおアメリカの占領政策が徹頭徹尾アメリカの国益のために立案実施された経緯については、西鋭夫(1998)がアメリカ国立公文書館が収蔵する貴重資料を精読して詳細に分析している。

の仕事では日本とフィリピンが合わせ鏡となって、互いの姿を照らし出すような考察をしなければと思う¹⁶。

3. 文化人類学のなかのネイティブ、または表象をめぐる問題系

ネイティブという言葉に関して、私の専門である文化人類学では、調査対象である（通常は異国の）現地の人々を指す言葉として便利に用いてきた。戦前には日本の民族学でも現地の人々を土人や蛮人・蛮族というような蔑称で呼んでいた。しかし今ではネイティブという言葉が未開や劣位という含意を持つことはほとんどない。アメリカ合衆国では先住民がネイティブ・アメリカンと自称したり一般にも用いられている¹⁷。しかし第二次大戦の前すなわち植民地が独立するまでは、調査する人類学者は欧米社会（宗主国）の一員として文明の側におり、他方で調査されるのは多くの場合に植民地化された国々の側、しかも首都や地方の中心都市ではなくて田舎や山奥で伝統的な生活を営む未開の人々（**primitive people**）であった。長期のフィールドワークをして民族誌（エスノグラフィー）を書くことを近代的な人類学の柱とし

¹⁶ 今まで、日本とフィリピンはきわめて対照的であるとされてきた。日本は明治維新以来の近代化（富国強兵）に成功し、アジア太平洋戦争に敗北（無条件降伏）した後の戦後復興にも成功した。いわば国民国家形成と殖産興業の大競争のなかで優等生だった日本と、それがうまくゆかず落ちこぼれ劣等生だったフィリピンというのが常識であった。しかし実はアメリカの影の下で自己形成を余儀なくされたという意味で、きわめて似たもの同士なのだ、というのが私の本のヒドゥン・アジェンダである。さらには、ジョン・ダワー（『敗北を抱きしめて』2003）が、軍国主義と財閥支配から日本人を解放し自由と民主主義をもたらしたと描いた戦後史を、横須賀からそして沖縄から見直すことで、今までとは少し違った視点からの自画像を描きたいとの密かな願いもある。横須賀で私が見たり聞いたり経験したりしたアメリカ像（実体でなく心象風景かもしれないが）をとおして、戦後日本の擬制を撃ちたいというのが意図であり願いである。構想中の書物だけで両社会の比較考察は完結しないだろうが、今回の報告はそこまでの長い道のりの第一歩となる。

¹⁷ ネイティブという言葉に関して、たとえばアメリカ人類学会の指導的な論客である M. サーリンズは *How "Natives" Think: About Captain Cook, For Example* (1995) を著し、キャプテン・クックがハワイ来航時に現地住民に殺害されたのは、住民が固有の宗教世界のなかでクックをロノ神の来訪ととらえ神話を反復する儀礼的な行為として殺害と再神格化を行ったと解釈した。それに対してスリランカ出身のオベイセーカラ (Gananath Obeyesekere) は *The Apotheosis of Captain Cook* (1992) で自身の経験と理詰めの考察を展開し、当時のハワイの住民は外部世界の情報にも接し、きわめて合理的な思考と行動をしていたと批判した。またハワイの先住民である H. トラスクは *From a native daughter: colonialism and sovereignty in Hawai'i* (1991) やドキュメンタリー・フィルムなどによってハワイ先住民の主権回復運動を進めている。ネイティブという言葉は今も重層的な意味を持っている。

で確立したマリノフスキーは、欧米の人類学者が現地のネイティブの視点に立って、まずは彼らが見ている生活世界を同じように見て理解することが大事であると説いた（“from the natives' point of view”）。

しかしその大前提が、E. サイドによるオリエント学（西欧による近東・中東の宗教・文学・文化研究）批判の大著『オリエンタリズム』（1986 [1978]）の影響を受けて揺らいだ。その影響は人文学の全般に及んだ¹⁸。サイド自身は『オリエンタリズム』では、アメリカ人類学の大御所のクリフォード・ギアツのイスラーム研究を高く評価している。しかもこの評価はギアツ個人だけでなく、人類学がオリエンタリズムとは異なり「自己の方法を再帰的に批判的に検討する」として、人類学全体への好意的な解釈をしている。[サイド 1986: 330]

しかしその後、サイドは1987年のアメリカ人類学会の招待セッションでの講演を発展させて、「被植民者たちを表象＝代弁すること」（1998）と題された論文のなかで初めて正面から人類学批判を行った。すなわち人類学もまた、優越的な西欧の観察者と従属させられた非西欧の土着の人々との民族誌的な出会いを通して生まれたゆえに、その起源において力関係の不均衡を内在させ、それを構造化してきた。にもかかわらず、その問題を主題化して向き合うことを避け、巧妙なテキスト戦略を精緻化することに特化したり（審美眼的な反応）、行為者の実践に排他的に焦点を当てたり（還元的にプラブマティックに反応）する修正主義的な研究によって延命を図ってきたことを批判する¹⁹。

¹⁸ 文化人類学の領域ではフィールドワークをすることと民族誌を書くことがどのように結びついているのか、そして民族誌がどれだけ現地の人々が生きるリアリティを「正しく」伝えているのかについての内省と、隘路の脱し方に関する模索が中心的な反応となった。J. クリフォードとG. マーカスの『文化を書く』（1996 [1986]）は、そうした問題意識にもとづいてニューメキシコ州のサンタフェで開催されたシンポジウムの報告論文を各執筆者が改訂したアンソロジーである。

そして編者の1人であるJ. クリフォードは、現地の人々のリアリティとそれを表象する民族誌テキストとの乖離と後者が前者を正しく伝えているかの問題に関して、「正しく」伝えているかについて正確であるかよりも真実であるかの方を問題化した。そして民族誌は部分的真実であるという限界を冷めた目で認めて、その上での対応を考察・模索した。「正しく」については、さらには政治的にあるいは世俗的に正しいかという、いわゆるポリティカル・コレクトネスの問題系がある。

¹⁹ サイド、1998 [1989]「抑圧された被植民者を代弁すること」『現代思想』26巻7号を参照。サイドの批判やクリフォードの立論については、九州大学教養部の同僚であった太田好信

そうしたサイドの厳しくもの射た批判にもかかわらず、『文化を書く』が引き起こした「ライティング・カルチャー・ショック」と呼ばれるほどの衝撃がもたらした自省や自己批判では、隘路を抜けるための延命策が主に民族誌の書き方をめぐって模索され試行された。しかし同書やサイドが提起した問題の根幹は、書き方や表象の仕方への批判というよりも、他者を一方的に表象してしまう（することを可能にする）権力関係、それを支えている政治的な支配や抑圧の問題であったことを忘れてはならない。歴史的に文化人類学では、西欧の植民地宗主国の研究者が植民地に出かけて行って、異文化をエキゾチック（で魅力的）な他者として描きだし、その後でエキゾチックではあるけれども十分に理解可能であるという考察や分析をする。そしてエキゾチックな他者と宗主国の側にいる自己とのあいだの溝が広く深いほど、そして両者を橋渡しして了解させる考察や解説、分析が明快であればあるほど高く評価されてきた。あえて露悪的に言えば、マッチ・ポンプか手品師のような仕事ぶりである²⁰。

そうではなくて、『オリエンタリズム』が提起したのは他者=異文化の描き方や書き方、という叙述のスタイルや表象の仕方にとどまらず、その問題系の背後にある異文化=他者との政治的・人間的な関係のあり方であった。サイドの問題提起は、西欧によるオリエントの文学や宗教の研究が、政治的な支配に支えられ、またその支配に支えられつつ同時に支配の仕組みを隠蔽しながら存続させている知的な制度に対してであった。端的に言えば、表象テキストの内部で問題は閉じられてはおらず、むしろテキストが外部の政治的な支配の枠組みに支えられつつ補強している点で、きわめて政治的な営為であるという指弾であった。その指弾を受け止めて開催された『文化を書く』のシンポジウムと成果である同書も、表象するテキストの問題に限ってしまえば偽問題の横道や迷い道に入り込んでしまう。表象する側とされる側との、表象テキストを介して結びつけられた関係について、両者を取り囲

(1994) さんから多くの示唆と情報、教示を得た。また福岡のご自宅で隔週土曜日の午後読書会とその後の夕食+続きの酒と議論の会を主催してくださった浜本満・まり子ご夫妻からも多くを学んだ。浜本邸での読書会で院生らとともに楽しく厳しく議論をしたことが、東南アジアとアフリカの諸社会の比較や理詰めを考える訓練となった。

²⁰ マッチ・ポンプとは、自分でマッチを擦って火をつけておいて、自分がポンプで水を掛けて消すと言う意味であり、偽善的な自作自演の手法・行為を皮肉る和製外来語である。

み、位置づけ、意味づけるテキスト外部の政治経済社会的な構造のなかで問題化されなければならない。

そのことをスピバックは『サバルタンは語るができるか』(1998) という端的な表現で問題化した。ただし反語的な書名が誤解を招きやすいが、彼女が提起した問題は、サバルタンが語れるかどうかではなく、サバルタンが語れること、実際に語っていることは自明であり、大事なのはそれが聞かれているか、そして聞いた側がそれに対して応答しているのかということであった。反語的な問いの形で求められていた答え(応え)は、両者の関係における対等性や応答関係の有無そして応答の仕方と内実の再検討であった。対等であることの原則は、たとえば独立した二(複数)国家間の国際関係において相互性(mutuality)が基本原則となっていることと同じである。国際関係では独立した主権国家の対等関係は、お互い様、やられたらやり返せ、の原則で実現される。極端に単純化していえば、自国の大使館員がスパイ容疑で国外退去の措置を受けたら、同じ数の相手国大使館員を国外退去させてバランスを取り戻すというクールな原則である。

同じように冷戦時代の米ソの核戦略も、相互確証破壊の論理(Mutual Assured Destruction, MAD: 大陸間弾道核ミサイルの脅威がもたらす極限事態の惨事への想像力)によって核抑止力(核の傘)が機能し、危うい均衡の平和が保たれるという正当化であった。やられたらやり返せという相互性の原則が徹底された場合に避けがたく起きる惨事への透徹した認識と恐怖が平和をかるうじて支えていた。私が生まれた1951年は朝鮮半島で激しい戦闘(朝鮮戦争, 1950~1952)が繰り返されていた²¹。そうした状況のなかでマッカーサーは、劣勢だった国連軍(アメリカ軍)が形勢逆転を図るために核兵器を使用して、合わせて将来に危惧される中国の軍事力の増大と潜在的な脅威を徹底的に排除すべきだと強く主張した。広島と長崎に続いて、北朝

²¹ 1950年6月25日に北朝鮮軍が一気に南下侵攻の奇襲作戦を展開し、アメリカ主導の国連軍と韓国軍を圧倒して一気に南端の釜山市まで侵攻し、半島全域をほぼ制圧した。敗戦必至であった国連軍は、マッカーサーが主導した仁川上陸作戦によって北朝鮮軍の兵站線を断ち、逆に北朝鮮へと攻め上がった。自国の国境線にまで追った国連軍に対して中国は人民解放軍を戦線に投入して国連軍を38度線まで押し返し、休戦となった(1953年7月27日)。その間、マッカーサーは中国の戦力ならびに軍事生産力に決定的な打撃を与えるために戦線のみならず満州の工業地帯も含めて原子爆弾を使用をトルーマン大統領に進言していたが認められず、逆に不興を買って解任された(1951年4月)。

鮮と中国の国境線あたりや南満州で核爆弾が実際に使われる可能性もあった。

朝鮮戦争の時の横須賀は軍事物資の兵站基地となり、また兵士たちの休養と慰安（rest and recuperation）のための施設が用意された地として米ドルが街の経済を潤した。どぶ板通りに父親がAサイン・バーを経営していたという知人によれば、「酒があつて女さえいれば、米兵が群がってきて店はいつも一杯」で、レジの横に石油缶を置いて支払いのドル札をそこに投げ込んでいたという。札を伸ばしてまっすぐにする暇もないほどすぐにドル札が盛り上がってくるので、手で押しついたり足で踏みついたりしたこともあったという。もちろんその頃のどぶ板通りのことを私は知らない。艦隊が入って万単位の乗組員が陸に上がってきた時だったろう。

私のかすかな記憶は、高校の頃、遅い午後にとぶ板通りに面したAサイン・バーの壁にピンナップのセミ・ヌードの女性の写真が貼ってあるのをドキドキしながら見に行ったことがあるくらいだ。店のなかには、こんなセクシーな女性がいるよ、寄ってらっしゃいという宣伝だろうが、『平凡パンチ』や『プレイボーイ』のグラビアみたいな写真が何枚も貼ってあった²²。が、期待したほど強烈ではなかった。それとちょっと暗くなるとジープに乗って銃を持ったMP（軍事警察）が巡回しているのを見たこともある。酔っ払った兵隊が喧嘩を始めるので、それが大騒ぎにならないように見回っていたのだった。喧嘩は黒人と白人のあいだで起こることが普通だった。私が高校生頃の（1967～70）はベトナム戦争がもっとも激しかった頃であり、どぶ板通りが朝鮮戦争時とならぶ活況を呈していた。

私が生まれた聖ヨゼフ病院にはその後も小学校を卒業するまで母親に連れられて小児科に通った。メガネをかけて優しい笑顔の高橋先生を母親は信頼して、私が熱を出す時も聖ヨゼフ病院だった。そこへは京浜急行に乗って安針塚駅から3つ先の横須賀中央駅までゆき、駅からは国道16号線に沿って歩き大滝町商店街を抜けたところで左折して向かう。左折した後の300メートルほどは、どぶ板通りの1本手前の並行した通りを歩く。ふたつの通りのあいだは30～40メートルほどしか離れていないが、病院への道に

²² 平凡パンチのグラビアのアグネス・ラムの黄色いビキニ水着のピンナップ写真を、テニス部の先輩が部室の壁に貼っていたが、そちらのほうがずっと（健康的で）セクシーだった。

はバーや飲み屋などなくて普通の下町の少々さびれた雰囲気でご飯とはまるで別世界だった。また引揚者寮では米軍や米兵の影を感じることが多々あったが、家のなかではさほど感じなかった。基地と米兵がすぐ身近にしながら、両親にしてみたら、まっとうな日本人ならば基地や米兵とはなるべく関わらずに暮らしてゆきたい、ゆくべきだとの思いがあったのかもしれない。それは両親に限らず、戦前から住んでいた地元の人たちの多くにとって同様だった。圧倒的な存在感があるからこそ、あえて見ないふりや関係ないふりをして過ごしていたのだろう²³。

それでも、横須賀で生まれ育ったことによって、私がアメリカ海軍基地の影のなか、その直接間接の影響を受けて自己形成をしたことは否定し難い。そのことに関係して、かつて私は「アメリカの磁場のなかの自己形成」(2011)と題するエッセーを書いた。歌手で映画女優・テレビ俳優の山口百恵と内閣総理大臣の小泉純一郎を取り上げ、彼らが暮らしのなかで見て聞いて体験したであろう基地の街・横須賀の実世界と、東京の政界や芸能界という擬製の戦後民主主義の虚世界を比較して論じた。ふたりは、横須賀と東京という乖離した2つの世界での生きる流儀の違いをふまえ、東京を主な舞台にして全国の観客を意識する演技者としてクールで熱くそしてニヒルと呼べるような存在感ある役柄を演じ続けた²⁴。

4. 応答する人類学の試行錯誤

『オリエンタリズム』が提起した問題に触発され、相互性について核兵器

²³ 私の父親は日本に引き上げてきてからは興亜院の上司の伝手でまず姫路の市役所に職を得た。しかし食糧難のさなか群馬県安中市の田舎まで米の買い出しに出かけるのが大変だったそうで、2年ほどで群馬に近い横須賀市役所に新たな職を得た。以後、横須賀市役所では定年退職するまでずっと港湾部に働いていた。なので米海軍基地とは少しは関係があったかもしれない。しかし仕事のほとんどは基地以外の港湾関係の整備（日産自動車の積出しのための追浜港や漁港）や馬堀海岸の埋め立て事業などであった。

²⁴ 正直にいえば、同エッセーは二人に仮託して私の心象風景を語った部分があり、ちょっとずるいかなと反省している。その反省を過激に進めれば、文化人類学者としてアエタやイフガオの村でフィールドワークを行い、彼らの生業、社会組織、儀礼宗教を調べ、分かったような顔をして民族誌を書くこととかなり似ている。私が書いた民族誌は、彼らの100%正しい理解や解説、表象ではなく、そこに私自身の推察や過剰な読み込みが入っているだろう。そして彼らの文化や社会を理解する背景として、日本との比較という暗黙の作業が入っているがそのことを明示的には語っておらず、問題化もしていない。

による相互確証破壊の論理を紹介しているうちに話が少々脱線してしまった。ここで立ち止まり、再びスピバックに戻りたい。スピバックが提起したサバルタンの声が聞かれていない、応えられていないという相互性を欠く力関係の不均衡という問題系は、実は日本人の人類学者としての私にも当てはまる。文化人類学の世界、すなわち欧米の知的ヘゲモニーがディシプリンという名でゲームのアリーナを設定し、そこでのルールや慣行つまり知的作業の進め方と実際の行儀作法を決めている世界では、スピバックが言うサバルタンに相当する位置に日本人の私も置かれている。しかしアホで脳天気な私は、ともすればサイドが痛烈に批判する西欧の知的世界も少しは分かる人間として、さらに無意識のうちに二流で味噌っかすではあるだろうが自分もまた西欧インテリの住む世界の端っこあたりに身を置いていると思っていた。しかし周辺部に身を置きながら（正確には周辺を自覚しているからこそ）世界の中心部の動向や知的な流行り廃りを気にしてチラチラ見ながら、その流行りに乗り遅れまいと勉強した。誠実そうな顔をしてサイドの批判を受け止め応えようとしたことさえも、文化人類学における欧米の知的動向を意識し、その流れに乗り遅れまいと半ば無意識のうちにそのヘゲモニーを甘受し、洗脳されていたことに半分の理由があるだろう。

けれども、桑山敬己は、『ネイティブの人類学：知の世界システムと日本』（2008）のなかで、そうしたお目出度い勘違いの誤りを的確に指摘し目覚めよと呼びかける。少なくとも私は、その声を聞いた。桑山は日本人は人類学におけるネイティブに似ていると断言する。なぜなら日本人は長らく西洋人による表象の対象であり、自らの声（つまり日本人自身による日本の表象）は、なかなか世界の中心に届かなかつたし今も届いていないからであると言う。桑山自身は、1982年に渡米してカリフォルニア大学・ロサンゼルス校大学院で人類学を学び、1989年に博士号を取得した後にはアメリカの大学（ヴァージニア・コモンウェルス大学）で教え、永住権も取得した。計11年にわたる大学キャンパスと周辺での研究・教育生活の経験をふまえて、アメリカの学会では彼もまた日本人ネイティブであることを強いられてきたと、その経験を痛切な思いで振り返る。

彼はアメリカのアカデミズムのなかにドップリと身を浸し、それゆえ「日本の人類学的貢献については疎く、むしろ多くのアメリカ人が心の奥底で抱いている非西欧の学問に対する偏見をそのまま受け継いでいた」と認める。

しかし日本に帰国してから、人類学の知の営みにおける西欧ヘゲモニーの強さを実感し、またポスト・コロニアルの時代の新たな思潮やネイティブの権利回復運動の台頭をふまえて、「こうした時代における人類学の課題は、特定の語りに特権を認めず、描く側と描かれる側はもちろん、研究対象の文化に関心を寄せるすべての人々に『対話空間』(dialogic space)を設けることにある」と提言する。[桑山 2008: ii~iii]

彼の内省と批判をふまえて、フィールドワークをすることと民族誌を書くという人類学者の営為において、ネイティブ(現地住民)との関係のありかた、とりわけ相互性の原則をどう確保し実現してゆけるのかという問いに戻ろう。それを私自身の経験を素材として考えてゆきたい。対等性と相互性の原則は二国間の国際関係だけでなく、文化人類学者が往還する2つの文化コミュニティ(自分のホームタウンと調査地のコミュニティ)のあいだ、その住民とのあいだでも適用されるのが筋であり理想であろう。桑山はそれを「対話空間」の設定や確保と説明した。私はそれよりも少しばかりラディカルな知行合一の応答実践として考えてみたい。

先に述べたように文化人類学の基本はフィールドワークであり、そこでの参与観察と文脈に即した理解が重要な柱である。もちろんその方法は人類学の独占ではなく、霊長類学でも同様である。ただし霊長類学に比べた人類学の参与観察は、目で観察することと、それ以上に耳で聞くこと、つまり習慣や儀礼や個々の行為やその他あらゆることについて当事者から言葉で説明してもらうことが情報収集の柱である。フィールドワークは、ある意味で目で観察すること以上に、耳で聞くことが重要である。

そして人類学者は、フィールドワークの際には見たことや住民から聞いた話をノートに書きとめ、母国に戻った後には民族誌を書くことに心血を注ぐ。フィールドでの参与観察や聞き書き、インタビュー、それらに関する彼らの説明を参考としながら、民族誌という調査地の文化をめぐるテキストを編み上げてゆく。その際に念頭にあるのはフィールドで対話を続けた人々であるよりも、人類学会の内部の先行研究であり、人文諸学の関連研究であり、それらとの間テキスト世界における応酬である。フィールドにおいて対話を続けた生身の人間同士の関係は薄れ、再びフィールドにもどって対話を再開

し、対話とそれに触発される作業を継続してゆくことは稀である²⁵。

私が提唱している「応答する人類学」[清水 2014] はとても単純である。フィールドで聞いた声に誠実に応える姿勢を続けようとする人類学である。コミュニケーションまたは対話に近いが、前者では意味が広すぎ、後者では狭すぎる。そもそも人類学者はフィールドワークの際には、日々見たり聞いたりして調査をしている。が、それと同時に、そしてそれ以上に、さりげなく見られ、さまざまに聞かれ尋ねられ要求もされている。日常生活のそうしたコミュニケーション、相互性にもとづくやりとりは、調査の外部や余剰というよりも、生活と調査が渾然一体となって進むフィールドワークの主要部分である。私自身がキリガン村で暮らしていたときには、病気の治療費や入院費、子供の学費、コミュニティ開発のための資金援助、その他さまざまな要請を受けた。それらをすべて聞き入れることはできないが、断固すべてを拒絶することも難しい。そうした際には、夕食のおかずとなるような山菜や野草、キノコ、川魚、野性蘭などを交換品として求めた。

そして今日ではフィールドワークを終えてからも、人類学者はお世話になった人たちとの応答を続ける。それは確認したい事柄の質問や近況の報告かもしれない。インターネットが急速発達した今日、メールやフェイスブックなどを使っての応答は、国内外を問わず互いに日常生活の一部となっている。そのような個人間のコミュニケーションとしての応答とともに、フィールドワークで住んだ村や町の人々が抱える問題や困難や期待をめぐって、調査を終えた後でも人類学者は関わり続けることが現在では決して珍しくなくなっている。調査の最中には資料と情報の収集を最優先しがちであり、気づきながらも深入りを避けてきたような事柄に関して、むしろメインの調査を終えた後から真摯に向き合う場合が少なくない。限られた調査期間だけでな

²⁵ フィールドワークにおいてはラポールが重視され入門の授業でも強調される。が、それは現地の人たちとまずは仲良くして受け入れてもらい、信頼関係を築きながら言葉を習得し、参与観察と折に触れての質問を許してもらい、色々教えてもらいながら文化と社会を理解してゆくための基礎や前提で終わってしまいがちである。そうしたフィールドワークは、たとえてみれば農耕の1サイクルに似ている。畑を耕し、種をまき、水をやり、大事に育てて収穫を待ち、終わればそれで完了して冬を迎える。しばし畑は枯れ草におおわれたまま放置されることになる。農民ならば春の訪れとともに再び農耕のサイクルを始めるが、多くの人類学者は1サイクルで終わることが多い。むしろ遠く離れた他所で新しい畑を開き、2つまたは3つの異なる畑で作業すること、そして収穫物を比較することが望ましいとされている。

く、その後が続く応答も含めて人類学をすることは続いてゆく。ただし応答の仕方は定まっておらず、人類学者の資質や相手との関係のあり方によって柔軟かつ多様な形を取りうる。

5. 相互性への試み、またはお互いさまに向けて

それに関係して西ルソン・ピナトゥポ山の南西麓のカキリガン村で初めてフィールドワークをしたときの応答に関わる個人的な経験を紹介したい。私が初めて予備調査のためにカキリガン村に行ったのは1977年6月だった。そのとき、その前年に村で定着犁耕農業と小学校教育を柱とする開発プロジェクトを始めたNGO・「少数民族開発のための全教会財団」(Ecumenical Foundation for Minority Development)のディレクターのルフィーノ・ティマ氏が、家族とともに住んでいた家(3LDK)の一部屋に1週間ほど泊めてもらった。夫人のアロマさんは、彼女と西麓ビリヤール村出身のアエタ教師と二人で始めた小学校の校長兼教師であった。そして10月に再び村に戻りフィールドワークを始めたときも、20ヶ月におよぶ滞在の前半はそこに寄寓した。その後はアエタの友人が作りかけて資金不足で放置していた家を借りて完成し、賃料を払って住んだ。

村に電気はなく、水道は近くの山の湧き水をいったんその横の貯水槽に貯めてから導水した2箇所の水場にひとつづつの蛇口があるだけだった。村で日々の生活を送るためには、水くみをはじめ、料理のための薪集めや食材とする山菜野草採り、焼き畑からサツマイモの蔓や里芋の茎葉を取ってきたり近所のアエタ家族からおすそ分けをしてもらったりするためにお手伝いが必要だった。乾期には毎日、雨期にも雨が降らない限りはほぼ毎日、夕方には河岸段丘の端にある村から20メートルほど下を流れる川まで出かけて水浴びをして、ついでに洗濯をした。そんな暮らしぶりなのでお手伝いが必要だった。けれど1人を雇うだけでは萎縮してしまって可哀だし、山下氏がフィリピン大学大学院言語学科に提出する修士論文をカキリガン・グループの言葉に関して書くための資料を集めていた。そのため、いつもアエタの日常会話を聞いていたいという強い希望があった。それで6畳一間ほどの部屋の真ん中にカーテンを吊るして左右に仕切り、村の小学校に通う数人の女子生徒たちと一緒に暮らした。我が家に住むコアなメンバーはパイチャイとカ



写真 4

我が家の土間のテーブルでの朝食の風景。手前の背中姿の左手がカルメリータ、右手がパイチャイ。左下の斜めの竹ハシゴを上がった高床の部屋をカーテンで2つに仕切って暮らしていた。1978年12月。

ルメリータの二人で、それ以外は私の家と各自の家を行ったりきたりしていた。それでも常に3、4人が寝泊まりし、食事だけに参加する者もいた。

そして時々私たちがマニラに行くときには、2~3人の子供たちも修学旅行と称して一緒に連れていった。第1回目に連れていったエヴァリスト君とエミリアノ君は、その後カキリガン村のサヤウ（ダンスの夕べ）の夜に「アモック事件」を起こしてしまった²⁶。カルメリータは2回目のグループの1人として連れて行ったが、国道まで出てバスに乗ってしばらくしたら青い顔となり、吐いてぐったりしてしまった。マニラに着くと高熱を出して寝込んだ。心配して山下氏の知り合いでWHOマニラ事務所に派遣されていたオゴヌキ医師のところにとタクシーで連れてゆき、診察してもらった。そこで注射を受け薬をもらって飲んだら、翌日には熱が下がって元気になってマニラ見物を楽しんだ。そのことでカルメリータは山下氏と日本の医療に全面的な信頼感を抱いた。

そしてサン・マルセリーノ町のハイスクールで勉強したいとの希望を実現するため、その前に日本にも出かけて見聞を広めることを強く望んだ²⁷。そ

²⁶ そのサヤウは私たちが住んでいた家の横で催され、私たちも巻き込まれたアモック事件の経緯と背景については別稿で詳細に報告している。(清水展 1983)

²⁷ その当時のフィリピンの教育制度は、小学校の6年間の後は4年間のハイスクール、そして4年間の大学になっていた。カルメリータの家族はカキリガンに移住して来る前は対岸のイバッド

れでフィールドワークを終えて引き上げる時に彼女を日本と一緒に連れて帰ることにした。その頃は日本の中年男による買春観光がフィリピンでも盛んになっていた頃だった（1年間で40万人ほどが訪問するなかで90%以上が中年男であった）ので、彼女のビザ取得に不安があった。若い女性の人身売買を疑われたら困るなどと思った。幸いなことに、マニラに駐在していた共同通信社の松下真支局長と時事通信社の羽生健二支局長が私の身元保証人となって推薦書を作成してくださり、スムーズにビザの取得ができた。ビザの取得前にはパスポートを取得する必要がある、それには少しばかり手間取った。というのはフィリピンには役所が管理する戸籍がなく、代わりに教会から洗礼を受けた際書類が出生証明書となり、バラングイ・キャプテン（村長・区長に相当）の身分証明書も必要だった。カルメリータは教会で洗礼を受けていないので、出生証明書に関しては町のお産婆さんに頼んで、確かに自分が助産して取り上げたという宣誓証明書を作成してもらった。

そしてちょうどタイミング良く、1979年6月1日から私が東大文化人類学教室の助手に採用されることが決まった。初出勤の2週間ほど前に私は日本に帰国して横須賀の両親宅に身を寄せた²⁸。カルメリータは、少し遅れて山下氏の帰国と一緒に6月中旬に来日し、彼女の両親が住んでいた福岡県京都郡豊津町光富の実家に行って3、4ヶ月一緒に暮らした。実家は農村地帯にあって、豊かな自然のなかで暮らすカキリガンの生活環境と大きな違いはなく、カルメリータが日本で不適応や病気になることはなかった。

カルメリータを日本に同行したのは、調査中にアエタの子どもたちを修学旅行でマニラに連れて行っていたことの自然な延長であった。またカルメリータが高校へゆきたい、大学でも勉強したいという強い希望を持っていることをうれしく思い、彼女に南西麓アエタ社会の若きリーダーになってほしいという期待をもったからであった。また先にも述べたようにフィールド

集落に住んでおり、そのときに彼女は少し離れた平地民の村の分校小学校に3年生まで通っていた。

²⁸ 助手の採用が決まったと手紙で連絡を受けたのは1979年の初めの頃で、これで食べてゆけると安心して山下氏との婚姻届をマニラ大使館に提出し、またカルメリータと一緒に連れて帰るための準備を始めた。けれども学生・院生時代に貯金はほぼ皆無であり、日本で独立した新生活を始めることはできなかった。それで私は横須賀に戻り半年ほど月給を貯めて、11月から葉山に小さな家を借り家具と電化製品を買い揃え、山下氏とカルメリータも福岡から合流して新生活を始めた。



写真5 左上：カルメリータの滞在を報道する朝日新聞西部本社版・夕刊第7面。(1979年8月20日) 右上：山下氏の両親とともに、自宅の庭で。(1979年7月27日) 右下：山下氏の祖母と小倉の祇園祭見物に。(1979年7月11日)

ワークと称して招かれもしないのに彼らの村に入って暮らし、一方的に参与観察(覗き見)やらインタビューをしていることへの負い目のようなものを感じていて、その埋め合わせやお返しというような気持ちもあった。

日本滞在の後に山下氏が年末にカルメリータをカキリガンまで連れ帰り、さらにサン・マルセリーノ町にある私立高校に入学するための段取りをした。入学後の授業料や町での生活費は私が奨学金として送金した。私の勝手な夢は、カルメリータが大学まで勉強を続け卒業後にはコミュニティーの若きリーダーとなってほしい、できれば大学院に進学して文化人類学を学び日本研究者になってほしいというものであった。カルメリータは学校の成績がよく、何よりも地頭が良かったので、そうした夢もいつかは実現してくれるかもと期待した。

彼女は町での生活も学業も問題なく順調に進学していったが、4年生のと

きに大恋愛をしていっとき学業を中断し、やがて退学してしまった。その後、1年ほどしてパンパンガ州のカパス町の郊外、キャンプ・オドニール近くに修道女が運営する女学校に転入学して卒業した。けれども卒業後は大学に進学せず、カキリガン村に戻ってやがて平地民の男性と結婚して3人の子供をもうけた。私の勝手な夢と計画はあえなく頓挫した次第である。

それで相互性原則の貫徹（彼／女らが日本に来て見聞・調査し日本について書く・語る）ができなかったのだから、せめて次善の策として、調査者として彼らを一方的に見て、聞いて、書く（表象する）私が、逆に見られ、書かれる対象となるという逆転による起死回生策を試して（弄して？）みようとするのが本書である。人畜無害の顔をしてカキリガン村に押しかけて住まわせてもらい、彼らの善意に甘えて日々の生活を見たり話を聞いたり（ときには盗み見とか盗み聞きのようなことも含めて）してきた以上、今度は私が覗き見や盗み見をしてもらってお相子（お互いさま）としたいというのが本音である。しかしそれでも「裸の私」（客体化された私）を見て書くのは、やはり人類学者の私（主体としての私）であるという矛盾は残り、あくまでもやむを得ずの弥縫策であることは自覚している。

6. 自文化＝自分化グラフィーという企て

本節では本稿のタイトルの新奇な言葉のもうひとつ、自文化＝自分化グラフィーについて説明をしたい。自文化とは私が生まれ育った横須賀と小学校2年生のときから高校を卒業するまでの11年間を通った私立学校（関東学院六浦小中高校）がある横浜の文化のことである。横須賀には米軍基地の影が色濃くかかり、横浜ではミッションスクールのキリスト教の教えと同級生たちから音楽とファッションの面でアメリカ大衆文化の影響を受けた。そのふたつの文化（基地とキリスト教）の影響または磁場のなかで私が作られていったと言う意味で、自文化＝自分化（土地の文化のなかで自分が作られてゆくと）という表現を使っている。そしてグラフィーは「記録する科学」「記述する学問」という意味である。文化人類学ではフィールドワークの成果である異文化の民族誌をエスノグラフィーという。地理学はジオグラフィー、写真撮影（術）はフォトグラフィー、伝記はバイオグラフィーである。だから自文化＝自分化グラフィーは、それらと同じで自分の文化そして自身の自

己形成に関する記録であり記述という意味である。

それを自文化=自分化エスノグラフィーと呼ばないことには、私なりのこだわりと理由がある。確かにエスノグラフィーと言う言葉が一般に受け入れられ、近年では災害エスノグラフィーやビジネス・エスノグラフィーという言葉が広く使われるようになってきている。災害エスノグラフィーに関しては、拙著『噴火のこだま：ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』（2021 [2003]）の説明として最適の言葉である。その本は20世紀最大規模で1991年に大噴火したピナトゥボ火山で被災した先住民アエタの復興と再生、正確には先住民としての新生の過程と背景を報告した民族誌だからである。そしてエスニック・グループやエスニシティ、さらにエスニック・フードやエスノ・ミュージックなどの言葉が今や日本でも市民権を得て、普通に使われ、広辞苑にも載せられている。

しかしエスニックやエスノは民族という意味である。私がこれから挑戦したい構想中の本は、きわめて均質な日本社会の構成員のひとりとして、金太郎館みたいな日本人のサンプルや代表としての私について語り論ずるものではない。むしろ東京中心の日本社会の常識にどっぷり浸かることができない少数者、捻くれ者、拗ね者や外れ者としての私についてである²⁹。なので自

²⁹ そうした感覚は、私が国道16号線に面した丘の上の「雀の学校・松濤幼稚園」に通園した後、地元の長浦小学校に1年通い、2年生から関東六浦小学校に編入学したときに強く感じた。卒園時に幼稚園からは長浦小ではなく関東六浦小に入学することを勧められた。そのときに父親は男の子だから多少は柄の悪い学校でも鍛えられて良いだろうからとその勧めを断った。けれど1年生の終わり頃に園長先生が我が家を訪れ、関東六浦小に編入枠ができたから、ぜひ試験だけでも受けさせるようにと父親を説得してくれた。そのとき7才離れた姉は地元の市立田浦中学ではなく汐入駅から坂道を上ってゆく市立坂本中学に越境入学して電車通学をしていた。田浦中がひどく荒れていて卒業式に教師が殴られたとか窓ガラスが石で割られたとかの噂が流れて怖いイメージがあったからである。

関東六浦小の雰囲気は貧困と粗暴がいつも身近にあった引揚者寮や長浦小ともちがって級友は皆が品良く優しくお坊ちゃん・お嬢さんという雰囲気だった。長浦小では給食が出たが、関東六浦小では各自がお弁当で、そのおかずが我が家の母の作るものとはちがって豪華だった（それが強烈な印象だった）。そして少々居心地が悪く、場違いなところに来てしまったと思った。それ以上に私立小学校に制服を来て通学することで、最初の頃は遊び仲間の年長者にいじめられたりしたこともあった。小学校と引揚者寮とまったく違う2つの世界を行き来しながらどちらの世界でもフルメンバーではないとの意識を持っていた。それぞれでまったく異なる自身の性格や振る舞いが自然と引き出されてくるような感覚もあった。

長浦小学校には寮から私のほかに3人の男子と2人の女子が入学した。卒業後には皆、田浦中学校に入学し、その後には男は就職（一人は日産に就職して夜間高校に入学）、女は卒業後にすぐ行方不明（駆け落ち・出奔?）となった。そんな子供時代だったので、大学に進学できた

文化＝自分化エスノグラフィーとすると、直訳が自文化＝自分化民族誌となってしまう、マジョリティーとは違ってしまったなど自覚自認する私とマジョリティーとしての日本人（民族）とを無理に合体させてしまうことになり、具合が悪い。

私が専門とする文化人類学ではフィールドワークが今も変わらず重要な方法となり有効なのは、統計数字や抽象的な理論で全体を広く捉えるだけでは、ともすれば現場の実態から離れた空理空論になってしまいかねないからである。私たちが暮らし生きている世界は、どこから見るとによってまったく異なった姿形で立ち上がってくる。身の置き方、視点の位置によって出現する世界の相貌は大きく異なり、しかしどれが真実でどれがインチキということではない。フィールドワークをする人類学は、顔の見える関係のなかで直接に観察し、見聞し、話を聞くことによって個別の民族と文化を具体的に深く理解しようとする。と同時に人類の歴史をふまえてヒトとしての共通性を探ろうとする。個別（民族・文化）の違いと多様性をふまえたうえで、普遍（ヒト・人類）を明らかにしようとしてきた³⁰。

だから自文化＝自分化グラフィーというタイトルには、個と全体、個別と普遍という複眼的な視点、重層的な理解への挑戦という文化人類学の初心や初志が秘められている。そして自分を素材として背景の文化と社会の全体性に切り込んでゆくという点で、近年着目されているオートエスノグラフィーと方法論的には似通っている。それはかつて「弟子入り人類学」と呼ばれたような、自らが弟子となって宗教的な精神世界の内側に身を置き体験し理解しようとする試みと似ている。青木保の『タイの僧院にて』（1976）やカルロス・カスタネダの『呪術・ドンファンの教え：ヤキ族の知恵』（1972）に始まる4部作（第3作の『呪術師に成る』（1974）では、著者自身が呪術師

ことが大きな幸運だった。東大に入れたこと、さらに大学に職を得られたことはまさに僥倖であり、だから逆に、いつも「はるばる遠くへ来たものだが、俺は、今、間違っここにいる」という感覚が抜きがたくあった。

³⁰ただし、現在では、その調査地もグローバル化の波に洗われて大きく変わりつつある。私が1998年から毎年短期調査を20年あまり続けてきた北ルソン先住民イフガオのハバオ村は、かつて山下泰文将軍が戦争末期に日本軍の主力舞部隊とともに3ヶ月ほど立てこもった山奥にある。そんな僻地の350世帯1850人ほどの小さな村から2010年頃で既に1割ほどの村人が海外25カ国以上の国々に働きに出ていた（清水2013）。フィールドワークがアリの眼で人々に生きられている世界を見るといいつつ、その生活の成り立ち方がこの20年ほどでグローバル化の影響を受けて急速に変わってきている。

となって「セパレート・リアリティ」の側に行ってしまう)などが頭に浮かぶ³¹。最近では、鈴木裕之『恋する文化人類学者—結婚を通して異文化を理解する』(2015)がある。

方法論としてのオートエスノグラフィーについては、2018年の文化人類学研究大会で分科会を組織した沼崎一郎が趣旨説明で以下のように説明している。それは「深く綿密な自己省察—概して『再帰性』と呼ばれる—を用いて、自己と社会、個別と一般、個人的なことと政治的なこととの間の交差点を名付けかつ審問する」ことにより、「何をし、どのように生きればよいかを見出す闘いの渦中にある人々と、その闘いの意味とを描き出す」(Adams, Jones, and Ellis 2015: 2) 企てである。そして「一人称で語る『私』の存在が全面的に登場する」オートエスノグラフィーの目指すものは、「自分の経験を振り返り、『私』がどのように、なぜ、何を感じたかと言うことを探ることを通して、文化的・社会的文脈の理解を深めること」である(井本 2013: 104)とも説明している³²。

それらには、私が横須賀での生育歴や自己形成の過程を振り返りながら、自分と横須賀とを相互参照的に浮かび上がらせようとする本書の企てとも相通じるものがある。その際に描き出される自分は書き手の自分と身体的には同一である。しかし少年・青年時代の自分を今の自分が振り返って書くとい

³¹ 社会学者の見田宗介は、たとえば連続射殺事件の犯人の永山則夫の手記『無知の涙』(1971)を手がかりにして、彼の生立ちの経緯と取り巻く社会環境が彼を殺人犯へと追い込んでいった経緯について「まなざしの地獄」(1973)と題する論考でラベリング理論をふまえて明晰な分析をしている。しかし自身のメキシコ滞在をきっかけとして、近代理性や合理性に疑念をいだき、カルロス・カスタネダの『呪術師になる』(1974)ほかの著作に示唆と刺激を受けて『気流の鳴る音：交響するコミュニケーション』(1977)を書いた。私は大学1、2年の教養時に見田ゼミを受講し、それ以後、文化人類学科に進学しても彼の書くもの特に真木悠介のペンネームで書くエッセーや本を読み刺激を受けてきた。

³² 具体的な作品としてはロバート・マーフィーの『サイレント・ボディ』(1992)が思い浮かぶ。彼はコロンビア大学の人類学科の教授のときに脊椎腫瘍によって身体麻痺が起こり、その後の自身の病状の進行と彼を取り巻く医療と社会についての詳細な報告をしている。それは彼自身の言葉を借りれば自身の身体をめぐるフィールドワークのエスノグラフィーであり、身体障害者を襲う恐怖の社会心理学であり、同時に現代アメリカ社会・文化論ともなっている。また石原真衣の『沈黙の自伝的民族誌：サイレント・アイヌの痛みと救済』はタイトルに自伝的民族誌にオートエスノグラフィーとルビを振り、クォーター (1/4) のアイヌであることを自覚して以来、アイヌを取り巻く周囲の眼差しや対応によって引き起こされる心の痛みを見つめることをとおして、自身の精神史であると同時にアイヌと日本社会に関する民族誌的理解と批評の新たな企てとなっている。

うことで時間的には大きな隔りがある。だから生々流転してきた自分は、何十年まえの自分とは違うと強弁できるかもしれない³³。けれど素直に単純に考えれば、今の私は幼少時から同じ身体と継続する意識や記憶の集積によって作られている。もちろん外界と他者の影響を強く受けながら、それに反発したり迎合したりしながら自己を形成してきた。周囲の環境や人間との不断の交渉をとおして自分が作られてきた。そのことを大前提としながらも、私自身を素材にするという点で、自分化グラフィーということになる³⁴。

他方で小川さやかが可能性を求めて模索し試行するオートエスノグラフィーは、それとは方向性が異なり、フィールドワーカー＝調査者も巻き込まれながらしかし主体的にはコントロールできない SNS 上での情報の流れが作り上げるリアリティ（生活世界）に着目する。香港でタンザニア人の商人について調査する小川は自身もまた、その SNS 上で噂話やゴシップの種

³³ 子どもの頃は横須賀の自宅と横浜の学校とを電車通学しながら切り離された別々の世界を生きていたということで、居場所によって分裂した気分や精神状態になっていた。が、しかしその両方の世界に違和感をいだくからこそ、両方から疎外されるような状態の自分への過剰な執着とも言える自意識と不安神経症的な心身問題を抱えていた。小学校6年生になって進学校として有名な栄光学園中学の受験を考え始めてからは症状が一段と悪くなった。それで父親が、たとえ合格してもその後の勉強が大変だろうから今の学校で気楽にやってくのが良いと受験を止めさせた。受験を断念してからは精神的なストレスが失せ、心身症も改善していった。栄光学園はイエズス会が運営する私立学校で、その最寄の田浦駅は京急線の安針塚駅と追浜駅のあいだにあり、朝夕の通学の際に駅ホームや電車のなかなどでその生徒たちを見かけた。制服姿とともに白いズックのカバンを肩から斜めにかける姿が格好良くてまぶしかった。

³⁴ 井本が定義するようなオートエスノグラフィーには、かつて「帰ってきた酔っぱらい」(1967)で280万枚を売上げ、オリコンチャート史上初のミリオンセラー・レコードを記録した3人組ザ・フォーク・クルセイダーズのメンバーであったきたやまおさむが執筆した『コブのない駱駝:きたやまおさむ「心」の軌跡』(2021)がびったり該当するだろう。同書はグループの解散後にイギリスに留学し、九州大学で精神分析家として教育と研究と臨床活動を続け、定年退職後にその起伏と陰影に富んだ人生における「自らの心の軌跡をリフレクションし」北山修と「きたやまおさむ」の対話をとおして (*ibid.*:288) 自身の精神分析をおこなっている。そこで焦点を当てるのは、主に彼の記憶であり当時の心の状態である。

ただし彼がポップスが好きだったり、同じ頃に九州大学で教員をしていたり、子供の頃に父親から「ほうず」と呼ばれていたことなど、私自身も彼と似たような経験と感覚を持っている。彼は「ほうず」と呼ばれることが嫌だったという。私も小さい頃に父親から「おうほう」と呼ばれ、それが隣近所や遊び仲間での私の通称であった。父が初め「おい、坊主」と呼び、それがすぐに「おい、ほう」そして「おうほう」となったという。小学校の高学年になったら家族では「ひろむ」と呼ばれるようになったが、隣近所ではずっと「おうほう」だった。大学生になった頃から「おうほう君」に変わっていった。

となり、日々の行動や旅行の計画なども勝手に SNS に流される。逆に調査のために必要な情報などを SNS に上げて尋ねれば、すぐに誰かが応えてくれる。今や SNS のネットワークは、かつて face-to-face (顔を合わせて) のコミュニケーションがメインであった小規模地域社会を超えて国境を超えて個々人をつなぎ、新たなネットワーク・コミュニティと呼びうるような相互に交錯しあい伸縮自在に変わる多数のグルーピング (緩やかな集まり) を生みだしている。それらのなかで「誰かの物語と誰かの物語、断片と断片がインターネットにおいて接続と切断を繰り返す。人間が分析可能な因果関係を超えて「根拠のない」コト・モノが根拠を賭けられ、物語となり、新しいエスノグラフィーが生まれる」と小川は説明する [小川 2017: 123]。

香港で調査と生活が分かちがたく一体となった彼女の暮らしでは、「タンザニアの零細商人のみならず、アフリカ諸国とアジア各国を移動する数多くのタンザニア人と SNS でチャットをしたり、インターネット回線を通じてビデオコールをしたりすることが日課になった」という。それゆえ、「先行研究の読解、調査計画の立案、フィールドワーク、分析と考察、論文の執筆のプロセスが細切れになり、そのすべての思考のプロセスに被調査者がコミットするようになった。私のオーサーシップはますます曖昧になった。気がつけば、人類学者が他者の文化を一方向的に表象する権力性をめぐる問いは新しいステージに入った」と断言する [ibid. 126]。

そして小川の果敢な取り組みは、タンザニアの調査地の友人知人たち、さらには面識もないような者たちも含めて他者たちとともに SNS のネットワークを流れる情報のアモルファスに生成し変化を続ける集積として始まりも終わりもなく続いている。それは open-ended のままに開かれて完結しないであろうポリフォニー (さまざまな声) の民族誌風テキストを意図せざるまま協同製作しようとしている試みと言えるだろう。そのテキストには著者も編者もなく、ひとつのトピックをめぐる情報や意見が乱雑にゆきかい生成流転するリアリティの一局面が一時的に共有され、特定のイメージと相貌をともなって蜃気楼のように現れるだけである³⁵。それに対して、私自身が狂

³⁵ このような情報と知識が流れ続けるネットワークにアクセスし参加することによって他者理解を進め、民族誌を作成することにチャレンジしようとしたのは、日本ではおそらく浜本満 (2001) が最初であろう。まず浜本は、記述対象としての従前の文化の概念がおそろしいほどに博物学の構図に絡め取られていることを指摘する。ある文化は特定の「集団に固有」で「誰もがもつ

言回しになり、地域の友人や学校の同級生たち、そして時代の雰囲気や気分
に焦点を当てながら、横須賀・横浜の文化についてこの本で語ろう（表象し
よう）としていることは、表象の問題をめぐる隘路の抜け方が正反対の方向
をめざしている³⁶。

小川が探ろうとしているオートエスノグラフィーの可能性に対比して、私
の自文化=自分化グラフィーへの挑戦は、比喩的に言えばスマホの自撮り写
真のセルフイーに似ている。セルフイーは自分で自分を撮るが、その場にい
る仲間を一緒に入れたり、訪問した場所や参加したイベントが分かるような
背景を入れて撮ることが好まれる。特定のコンテクストのなかの自分、その
ときそこにいた時間と場所を写し込むことが大事である。しかも撮った写真
はSNS上にアップされ、友人サークルや不特定多数に向けて発信される。
逆に発信を意識し前提としてセルフイーは撮られると言うこともできるだろ
う。それは絵画における画家の自画像（セルフ・ポートレート）とは異なる。
自画像では、普通、画家本人の顔がアップとなって強調され、背景は焦点を
はずされぼかされて人物像を押しつけてしゃしゃり出てくることがない。

ている」とされるが、それでは文化は個に対する類としてのカテゴリーの属性、その成員の共
通属性とされるしかない。しかし、そこで実際に記述されるのは、複数の人々の語りの共通部
分や平均をとったものではなく、人類学者によるそれらの総合と体系化の手続きの産物であり、
とても現地の特定の個人には原理的に回収できない代物である。そうして描き出された知識体
系は、どの具体的な個人のもつ知識とも違うのだから、いったい誰の知識だろう、と彼は問う。
まさか人類学者の知識とは言えないので、知識保有の集合態を召喚して「なにに人」の知識
だと言ってしまう。そして、いったんこうした主体が呼び出されてしまうと、それは今度は博
物学的な構図か解剖学的な構図を通してしか、その集合態を構成する個に接続することができ
ない。こうして自己撞着をかかえたまま堂々巡りが繰り返される、と浜本は明快に指弾するの
である [ibid. 41-43]。

そして人類学の作業が見出す知識の体系が個人にも集団にも帰属させえないものであるな
ら、そうした知識と体系が存在する場はある種のネットワーク空間に帰属するものとして想像
することが妥当になり、それを浜本は言説空間と呼ぶ。ただし浜本はその情報と知識が流れる
開かれたネットワーク上の言説空間をそのままに民族誌として描き出すことを構想するもの
の、実際にチャレンジしてはいない。元々が数学科に進学を希望していたほどに理詰の思考
とIT関係のメカにめっぽう強いので、個人的には小川と同じようにSNS上でポリフォニーの民
族誌風テクストを試行錯誤しているかもしれない。

³⁶ その意味では先に紹介したオートエスノグラフィーの井本の説明「自分の経験を振り返り、…
探ることを通して、文化的・社会的文脈の理解を深める」に近い。しかしエスノ（民族の）で
はなくセルフ（自分の）グラフィーである点がラディカル（過激で根源的）であり、ぶっ飛ん
でいる。

7. おわりに

本稿は、長いあいだ構想をあたためてきた本の序論に当たる。文化人類学を50年にわたって学んできた者として、学の存立に関わるフィールドワークと民族誌に関しては、少々理屈っぽいことを書いてきた。第2章以降になる本編では、私の心象風景と記憶のなかの横須賀、そして横浜を物語りのような語り口で書くことを心がけたい。

本稿は序論に当たるので、本の全体にわたる結論を、今、ここに簡明にまとめることは難しい。物語の展開は、私自身もまだはっきりと見通すことはできておらず、オープン・エンドに開かれている。応答の人類学の試行錯誤を、その時々状況に巻き込まれながら手探りで道を探して歩いてきたように、目ざす本の作成も記憶を呼び起こし、関係する資料を当たり、同級生や友人知人たちにインタビューし、それがまた新たな発見と理解を生みながら少しずつ進んでゆくだろう。

私が夢想(妄想?)している自文化=自分化グラフィーは、画家本人と背景の両方がしっかりと描きこまれた肖像=風景画のようなものである。または広角、望遠、標準、接写レンズなどを使い分けながら、広い視野で遠くの風景まで撮影する写真(鳥の眼)と、反対に自分の身近な対象に狭く焦点化して細部を撮影する写真(虫の眼)の両方を紹介し説明することをおして、重層的に成りたっている世界の全体そのものを複眼的に捉え、そのまま立体的に写し出そうとする試みである。そして私自身が周囲のさまざまな人や物や出来事に影響されながら自己形成してきた過程を記述することをおして自分化グラフィーになると同時に、逆に自分を素材として描くことでその時どきで見てきた周囲や背後の風景と社会文化状況までも具体的にリアルに描き出そうとすることで自文化グラフィーにもなる。

もちろんその両者、自分化と自文化とが不可分な関係で結ばれていることは言うまでもない。本書は両者が相互反照的に互いを照らし合うことで、具体的な相貌を浮かび上がらせようとする企てである。その相互作用を描くことで、私自身の自己形成の過程と、自分と周囲(横須賀・横浜と東京)の文化社会景観とを絵巻物のように流れる物語として、また言葉の糸で編み上げたタペストリーの連作のようなものとして本書を作りたいと願っている。夢路は遠くまで続いているが、実際に歩いてゆくことは大変そうである。

付 記

本稿のための調査研究は、科研費・挑戦的研究（萌芽）「自文化の民族誌への挑戦：生まれ育った横須賀から日本文化・社会を再考する」(17K18529, 2017～2019, 代表・清水展) と科研費・基盤 A「応答の人類学：フィールド、ホーム、エデュケーションにおける学理と技法の探求」(16H01968, 2016～2020, 代表・清水展) により可能となった。

また同名の研究発表を国立民族学博物館・共同研究「海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み」(片岡樹代表) で行い (2021年2月23日)、出席者から多くの質問と助言をいただいた。

参考文献

- 青木 保. 1976. 『タイの僧院にて』 中央公論社.
- 浅野幸穂. 1991. 「独立後のフィリピンと 1960 年代」『フィリピン：マルコスからアキノへ』 アジア経済研究所.
- 井上章一郎. 2015. 『京都ざらい』 朝日選書.
- 石原真衣. 2020. 『沈黙の自伝的民族誌：サイレント・アイヌの痛みと救済』 北海道大学出版会.
- 井本由紀. 2013. 「オートエスノグラフィー：調査者が自己を調査する」藤田結子・北村文（編）『ワードマップ現代エスノグラフィー：新しいフィールドワークの理論と実践』 新曜社.
- 太田好信. 1994. 「オリエンタリズム批判と文化人類学」『国立民族学博物館研究報告』 18 卷 3 号.
- 小川さやか. 2017. 「オートエスノグラフィーに溢れる根拠なき世界の可能性」『現代思想』 45 卷 20 号.
- カスタネダ, カルロス. 1972. [1968] 『呪術・ドンファンへの教え：ヤキ族の知恵』 二見書房.
- カスタネダ, カルロス. 1974. [1972] 『呪術師に成る：イクストランへの旅』 二見書房.
- きたやまおさむ. 2021. [2016] 『コブのない駱駝：きたやまおさむ「心」の軌跡』 岩波現代文庫.
- 桑山敬己. 2008. 『ネイティブの人類学：知の世界システムと日本』 弘文堂.
- クリフォード, ジェイムズ& G. マーカス (編), 1996 [1986] 『文化を書く』 紀伊国屋書店.
- サイド, エドワード. 1986 [1978] 『オリエンタリズム』 平凡社.

- . 1995. [1993]. 『知識人とは何か』 平凡社.
- . 1998. 「被植民者たちを表象 = 代弁すること」『現代思想』 26 卷 7 号.
- 清水 展. 1983. 「変容するネグリート社会の苦悩：ある若者のアモック事件をめぐって」『東洋文化研究所紀要』 96 冊.
- . 2011. 「アメリカの磁場のなかの自己形成—山口百恵と小泉元首相をとおしてみるヨコスカと戦後日本のねじれ」藤原帰一・永野善子（編著）『アメリカの影のもとで—日本とフィリピン』法政大学出版会.
- . 2013. 『草の根グローバリゼーション：世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学出版会.
- . 2014. 「応答する人類学」山下晋司（編）『公共人類学』東京大学出版会.
- . 2015. 「先住民アエタの誕生と脱米軍基地の実現：大噴火が生んだ新しい人間、新しい社会」清水展・木村周平（編著）『新しい人間，新しい社会：復興の物語を再創造する』京都大学学術出版会.
- . 2020. 「外部思考 = 感覚器官としての異文化・フィールドワーク：ピナトゥボ・アエタとの 40 年の関わりで目撃した変化と持続，そして私の覚醒」『東洋文化』 100 号.
- . 2021 [2003]. 『噴火のこだま：ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学学術出版会.
- 鈴木裕之. 2015. 『恋する文化人類学者—結婚を通して異文化を理解する』世界思想社.
- スピヴァク, G・C. 1998. 『サバルタンは語るができるか』みすず書房.
- 袖井林二郎. 1985. 『拝啓マッカーサー元帥様：占領下の日本人の手紙』大月書店.
- ダワー, ジョン. 2001. 『敗北を抱きしめて：第二次大戦後の日本人』岩波書店.
- 永山則夫. 1971. 『無知の涙』合同出版.
- 西 鋭夫. 1998. 『國破れてマッカーサー』中央公論社.
- 浜本 満. 2001. 『秩序の方法：ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』弘文堂.
- 藤原帰一. 1993. 「冷戦の二日酔い：在比米軍基地とフィリピン・ナショナリズム」『アジア研究』 39 卷 2 号.
- 真木悠介. 1977. 『気流の鳴る音：交響するコミュニケーション』筑摩書房.
- マーフィー, ロバート. 1992. 『サイレント・ボディ』新宿書房.
- Adams, Tony, Jones Stacy, and Ellis Carolyn. 2015. *Autoethnography*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Obeyesekere, Gananath. 1992. *The Apotheosis of Captain Cook: European mythmaking in*

the Pacific, Princeton, N. J.: Princeton University Press

Sahlins, Marshall. 1995. *How "Natives" Think: About Captain Cook, For Example*, Chicago: University of Chicago Press.

Trask, Haunani-Kay. 1991. *From a Native Daughter: Colonialism and Sovereignty in Hawai'i*, Honolulu: University of Hawai'i Press.